# スペイン革命におけるＣＮＴ（11）

ホセ・ペイラッツ
今村五月訳

## 第一三章　政治と革命（つづき）

二大組合本部のトップによる同盟への第一歩は一一月二六日に踏み出された。この年五月、連合の会議によって革命的同盟の動議が採択されて以来、スペイン・プロレタリアートの由緒ある二組織の全国的協調のためのあらゆる努力は無駄だった。カタルニャで調印されたＣＮＴ－ＵＧＴ－ＦＡＩ－ＰＳＵＣ協定はいわば状況に要請されたものである。カタルニャのＵＧＴは共産党の腰巾着で、反動的小ブルジョアの避難所である。協調どころか不協和である。革命によって利益をそこなわれた分子たちが大同団結して、唯一の敵はファシズムでなくＣＮＴであるとするにわかづくりの組合の代理が調印に来ている。この協定はいわばプロレタリアートに変装した反動に対する交戦中の譲歩のようなものだ。ＵＧＴとＣＮＴの全国的な大同盟のための礎石としても失敗である。共産党は二大本部の団結を決して望まなかった。その政治的死滅を意味しただろうからだ。だからＣＮＴと団結したＵＧＴを見るよりは、分断され引き裂かれたＵＧＴを選んで、その団結を妨げたのだ。

一方、疑うべくもないＵＧＴのリーダーであり、かつては共産主義の影響を受けた労働者たちに崇拝されたラルゴ・カバリェロは、彼のような地位にある労働者党のリーダーとしては許されぬ洞察の欠如を暴露した。彼はＵＧＴ内部ばかりか彼自身の党内部の、将来起こるであろう事の方向すらも、予測することができなかった。カバリェロはある日、進歩によるアナキズムへの接近は恥ならず、日頃の彼の地位の後退もまた然りと言明しなければならなかった。しかしながら、ＣＮＴとの革命的統一の問題でとった用心深さと気長さが、彼自身の組合の幹部に共産党が潜入することを助けた。つまり、彼の政治的な敵へのＵＧＴの引き渡しを手伝った。

一一月二六日にＣＮＴとＵＧＴの代表部は、統一を目標とする交渉が開始されたと推測される文書に署名している。この文書は、その後はるかに遅れて、あまりにも遅れて来るであろうことの予備契約書である。その文書とはこれだ。

「スペインCNT全国委員会代表団とUGT執行委員会は、労働者階級が提起した種々の問題に必要な判断の基準とともに、それら諸問題の即時解決に到達するためにはどうしても定めなければならないと考えられる基準を、共同で決定するために会合し、労働者が各人の考えと理想をよりよく代弁しうる組織に加盟する権利を相互に保証しつつ、また、各組合がその態度を従来の綱領に従って決定する権利を尊重しつつ、すべての組合機関に対し、相互の関係における最大の礼節を要求するために、通告をだすことを決議する。

基本的な諸問題は人民全体、特にプロレタリアートに影響を及ぼす。戦争、接収、集産化、土地、輸送、工業、経済、自治体、商業、等々、いくつかをあげてみてもそれらの問題の結果は何者にも免れがたい。

これらは人民の社会生活の中心を意味しているのだと我々は考えている。スペインの働く民主的階級は、みずからの前に国際ファシズムに伴われ保護された現実の敵を有する時、思想的には隣人関係にある者たちを暴力的に破壊して己れの威光を確立しようとしたり、数的な勢力を誇示しようとしたりすることは、何者にも許されない。従って、CNTとUGTはともに、先に述べた諸問題の解決を探るために、プロレタリアートの双方の代表団の間で討議が始められたら、両組合に加盟している労働者は互いの間で、人間としてふさわしい寛容と尊敬を守ることが義務とされるということを理解するよう要求する。もし我々の討議に時を合わせて我々の代表する勢力の間で衝突が起きれば、統一のための我我の努力は良い成果をあげることはできないだろう。この議論は当然すぎる論理だから、大した説明はいらないと我々は考える。従って、この公式の覚え書は、労働者、幹部会、労働総同盟の当該の委員会、労働全国連合に対して、労働者の間の討論と磨擦をあらゆる手段によって禁止すること、ならびに戦闘の最前線に全員が注意を怠らないことを最後の忠告とする。これは、かつて一度も人民が経験したことのない友愛の新たな時を告げるものである。

現在にあっては、プロレタリアートの団結のみが我々を勝利に導くことができるのだということを銘記せよ。CNTとUGTの代表部は、ごく短時間のうちに、さしせまった現実の諸問題についての見解を発表するだろう。そして、その時が来れば、義務遂行の規律を標榜する諸組織に対し、共和国の正式な政府が指示する規則への敬意を要求するものである。それは、我々が勝ちとることを欲し、かつ勝ちとるであろう勝利を獲得する唯一の方法なのである。――CNT全国委員会代表M・R・ヴァスケス・書記長、マカリオ・ロヨ・アラゴン代表、ガロ・ディエス・北部代表、クラロ・ホセ・センドン・東部代表、N・バエス・カタルニャ代表、マヌエル・アミル中央代表、マヴェリノ・G・エストリアルゴ・アストゥリアス代表。――UGT執行委員会代表ホセ・ディアス・アロル副議長、パスカル・トマス・副書記長、フェリペ・プレテル・イグレシアス・会計、カルロス・エルナンデス、マヌエル・ロイス、マリアノ・ムニョス、アマロ・デル・ロサル、リカルド・サバルサ各委員――ヴァレンシア、一九三六年一一月二六日」

二七日、工業相ファン・ペイローはヴァレンシアのアポロ劇場で講演して、「戦争には勝たなければならない」というテーマで論じた。講演者の発言は大衆の間にいくつかの抗議を誘発した。

曰く、「今夜私が言わねばならぬことはほとんど重要でないと自分でわかっている。ちょっと残念なことだが、私はいつも面白くない役目につかされるのだ。真実を語れば多くの友愛が失われることを知ってはいるが、あえて私は一つの批判を表明したいと考え、その批判に従っていく……」「戦争を短縮するには、それは経済とひいては革命を救うことでもあるのだが、我々の一人一人が現在の情況をよくのみこまなければならない。現実は前線と銃後における規律を要求している。今日でも、幸い事態は変化しつつあるが、塹壕で日々命をかけている男たちの間にさえ、戦争を畏びかせ無用の犠牲を出す軍規弛緩の存在することは、確かな事実である。さきほども言ったが、幸いこれらの事態は変化しつつある。しかし、大切なことは、軍規弛緩に最も親しい諸君が、今や戦争には軍規が必要となっていることに気づくことだ。ばらばらの決定、私がマタロでやったようなことは、終らせなければならない。マタロでは一個人が数人の同志に支持されて戦争委員会から暴力で約束をひきだそうとした。昨夜起こったことに注意したまえ。昨夜、ここをカルタヘナへ向かう七百人のカタルニャの同志が通過した。カルタヘナでは晩さんが用意されていた。ところが今日は早くも、カルタヘナでは最良のホテルに宿舎が用意されていなかったという口実で、制止する者もなく引き返していった……」「もう一つの例はヴァレンシアで起きていることだ。政府が一つの命令を出した。すぐに地方委員会の指令が妨害した。全員に命令するには全員が組織されていないのだ。政府が無用なのか、委員会が無用なのかだ。」

講演者はここで聴衆によって中断された。そして場内に一瞬混乱を引き起こした。講演会の司会が講演者の論旨の展開に注意するよう要請した。彼は続けた。

「その声は何を言いたいのだ？　委員会が無用だって？」

場内に再び叫び声。そうだ！　いや！　講演者は明らかに議論の調子を変えた。

「委員会は無用ではない。不足なのは政府を補助する分子ではないかということだ。カタルニャではこの問題はすでに解決された。地方的規模では、自治体は、UGT、CNT、共産党などが代表を送っている評議会によってとって代わられた。カタルニャでは評議会はネラリダッドの協力者である。ここでは決して無用ではないのだ。同志諸君、なぜなら、同時に革命を指導することを考えなければならないからだ。だが有効に働かなければならない。我々は言っている、まず戦争、それから革命、と。しかし、もし我々の批判するような妨害に出会うなら、二つともに失われてしまうだろう……」「CNTのメンバーはそういう無規律の群衆を代表して政府に入ったのではなく、全く反対に、規律と単一の命令を要求して入ったのである。そう、単一の命令を。中央の前線にはそれぞれ独立した六つの参謀本部があるというのは納得しかねる。中央に一つ、北部に一つ、南部にもう一つあるのはかまわない、しかしそれらはみな中央参謀本部に従属するものだ。我々連合は、諸君にも言うように、もし我々が流血を回避したいのなら、前線には命令する者と従う者のいることが必要であると、政府に進言した。実際、我々は戦争でアナキストを見出す

必要はなく、見出すべきは兵士なのである。だから、各瞬間に何が命令されたかを調べなければならないにしても、責任は彼らにあるのだ。そのために私は以前は委員会は無用ではないと言っていた、が、命令は必要である、すみやかに戦争に勝つためには不可欠でさえある。我々は何を犠牲にすべきか？　私は知っている。だが同志諸君、君たちはアナキストが政府と自治体に参加することよりも大きい犠牲を望むのか？　それ以上の犠牲を要求するのか？　でなければ我々は我々の兄弟に苦痛と血を免れさせ、それはあらゆる犠牲から我々を購わないであろうか……」

一二月四日、同市で開かれた集会にガルシア・オリヴェルとフェデリカ・モントセニイが出席、前者は次のように発言した。

「戦争に勝ちたいのか？　それなら、労働者のイデオロギーや綱領や彼らの参加している組織がどうであろうと、勝つために敵が用いている手段、特に軍規と統一を用いなければならない。効果的な軍規と軍隊組織をもてば、我々はまちがいなく勝つことができるだろう。戦闘と労働における軍規、すべてにおける規律は、勝利の土台である……」

「最後に――と、フェデリカ・モンドセニイは言った――数日間カタルニャに行ってきて、私は非常に重要なことに気づきました。私は多分自分の発言にもう少し厳しくあるべきでしょう。それが直接に戦争だということを考えない者が革命的ストライキで暮している。工業と作業所を彼らが掌握しなければならない。ブルジョアを消してしまうや安心して暮らし、ある工場では一人のブルジョアの代わりに七、八人のブルジョアがいる。こんなことは許せません……」

演説者は続けた。

「それにもかかわらず、カタルニャの武器工場で一〇時間、一二時間あるいは一四時間も働きながら痛ましい経験のうちに今日は一人、明日は二人と死んでいく同志たちのことを忘れられません……」

次に引用する記録と類似した重要な事件は、あまりにしばしば議論の中で黙過されるほど独立していたのではない。

「イハル村――当地方の調査局は次のことを明らかにした。数日前、アラゴンの当支部にいる同志たちを動員した後、おそらくはマドリッド前線を補強する目的で、アラゴン地方委員会はドゥルティ部隊に配属するために千人を動員する決定を行なった。結果は、失なわれた千人に代わって、六千人あるいは五千人が、すなわち残りの者がいて、武器を待っており、戦闘の準備をしている――評議会」（一九三六年一一月二七日『ソリダリダッド・オブレラ』に発表された）

ペイローが開いた講演会では、彼はナポレオンの名句を借用した。「戦争に勝つためには、金、金、金がいる。」政府はそのころ一体何をしていたのか？　連合の大臣たちを人民とCNT自身にまでけしかけ、スペイン銀行の金つまりは外貨であり、カタルニャに集中している軍需工業の原料であり、命を捧げるために献身的に志願兵となって送られ、決して届くことのない一ちょうの銃を待っている人民の息子たちの武器である金を持っている、その政府は？

著書『なぜ戦争に敗れたか』の中でサンティリャンは言う。

「……そして金は、数週間後マドリッドを去った。カタルニャへではなくロシヤへ向けて。五百トン以上の金がスターリンの手に



陥ち、我々の戦争を失い、世界ファシズム反革命の戦線を強化するために役立ったのだ。しかも政府の知らない間に、クレムリンの支配下にあった一人あるいは二人の大臣、その一人は有名なネグリン博士だが、の決定によってロシヤへ去ったのだった。」

公表されたところによると、事件当初、スペイン銀行は計二二億五八五六万九九〇八ペセタの金、すなわち地金で二五七万七八七一ペセタ、スペイン貨幣で三億九三一八万三〇八〇ペセタ、外国貨幣で一八億六二八〇万八九五七ペセタ（イタリア銀行の二倍の保有）を所有していた。他にフランス銀行に預けられた一二〇〇万英ポンドがあった。政府のペセタ、あるいはむしろ共和派地区に存在する銀行券は、世界にも類のないことだが、その金によって百パーセント保証されていたのである。さらに、莫大な資本が革命的人民によって教会やその他の反動の巣窟で発見されていた。一方では、人民によって行なわれた大量の銀行券や国債の焼却によって、政府の債務は大部分縮少されていた。手元の保有は、それだけで長期の戦争を負担し、不干渉ブロックをも含むどんなブロックにも対抗し、人民を十分な状態に武装し、外国で華々しい宣伝を続けるために十分だったのだ。にもかかわらず、かくも美しく約束された可能性にはるかに遠く、政府の無能は、フランコのペセタを戦争の数カ月間で政府のペセタの二倍の価値にまで騰貴させるようなことをしたのである。

これらすべてのことは一体何に原因があるのだろう？　まず第一に、ヨーロッパとの交流の鍵であるカタルニャで展開されていた運動を恐れ、金を人民の管理に委ねることを決して肯じなかった共和国政府に。金はむしろ革命を妨害するための武器として利用された。第二に、政府の船舶と飛行機は当初から、フランスやイギリスの多くの銀行に貯蓄されていた外貨の現金輸送のために使われていた。第三に、ラルゴ・カバリェロ政府がロシヤ大使ローゼンベルグと密約を交わした。それによってソ連は、五億ペセタの金をロシヤに預ける代わりに、戦車と飛行機と軍需品を送り、強力な国際遠征部隊（国際旅団）を創設すると約束していた。

反乱軍のラジオは政財界にこの密約の条項を暴露した。

一九三六年一二月二日、『官報』は最近印刷されたばかりの反乱軍の紙幣はそれを保証する金保有がないと宣告する政令を公布した。また、スペイン銀行の金銀の保有はすべて正式な政府の所有であって、それらの印刷紙幣に責任をもつものではなく、真正の紙幣に責任をもつものであると発表した。同じ日、大蔵省の次官は新聞記者に対して、スペイン銀行は十分の金を有しており、通貨準備金を優に上回っていると発言した。

フィラデルフィアの『ザ・サタディ・イヴニング・ポスト』紙に前ロシヤ将軍W・G・クリヴィッキイが発表した回想録では、次のように語られている。

「そのうちに、アルトゥロ・スタチェフスキイは、政治力は経済的基礎に由来するという理論に基づいて、共和国の財政管理をソヴィエトの手に確保するために、あらゆる努力を展開した。彼はスペインとスペイン人を愛した。二〇年前のロシヤ革命の経験が甦えることを信じていたので、その任務に愛着をもっていた。蔵相ファン・ネグリンのうちに自分の財政計画を進んで提供してやる協力者を見出した。マドリッドは、世界市場ではどこの国であろうと武器を買うにはほとんど無力になっていた。スペイン共和

国はフランスから軍需物資を輸入しようとして、その金保有の相当量をパリの銀行に預けてあった。しかし、どうしようもない困難が生じた。フランコが、勝利した場合の彼らに対する処置でもって脅迫していたからだ。そうした要求は不用意にもクレムリンに届いた。スタチェフスキイはスペインの金をソヴィエト・ロシヤへ送ること、その代わりに武器弾薬をマドリッドに供給することを提案した。ネグリンを介してラルゴ・カバリェロ政府と協定が結ばれた。とにかく、外国ではその新聞は、ソヴィエトの援助をあてにして国庫の一部を抵当に入れたと、ラルゴ・カバリェロを批難した……。一二月三日、金の輸送が準備されている時、モスクワはそういう協定がなされた事実を公式に否認し、また、その頃はスペインにおけるソヴィエトの干渉に関するあらゆる情報を否認していた。我々の間ではスタチェフスキイを『世界一の金持』と皮肉をこめて呼んでいた。スペインの財務当局を動かした手並によるものだった。」

作戦は秘密裡に遂行されたにもかかわらず――サンティリャンによれば、連合の大臣も含めて政府閣僚の大半をびっくりさせた秘密――、サラマンカ放送局は大騒ぎを起こした。バルセロナの『ソリダリダッド・オブレラ』は、当の大臣たちよりもよく情報に通じていたらしく、一九三七年一月一五日に次の記事を発表した。

「外国にわが国の金を保管――金保有を外国に送るという馬鹿な考えを誰が認めたのか？　これは七月一九日以降統治してきた人物たちによってとられるべき、最大の責任の一つである。防衛国民政府が成立するまでのこの不幸な期間の出来事に関しては、大いに議論し詮議されなければなるまい。その間の日々は霧と秘密と説明のつかない誤りでいっぱいだが、その一つは将来最も悲しむべき誤りとなるであろう、金保有の外国への移送に関することである。

そんな処置をとるなら、不幸にして我々が戦争に破れた場合には、外国に渡してしまう前に最後の一ペセタまで革命の防衛に使うべきだった金の保有を、我々の破滅の到来まで保証しておくことと以外に何もしなかったのだということを、誰が疑うことができようか。また同じく、それら数億の貴金属が、大国にとってはのどから手がでるほど欲しいものであることは秘密でもなんでもない。外貨を持ち続けるということについては、全ヨーロッパでいかにしてそれが費されるかを我々はすでに知っている。外交は貿易における反対信用とバランス、そして分捕りを正当化する一連の奸策をでっち上げる。カルヴォ・ソテロは独裁制の末期に、後に拒絶された取引きを保証するために、フランス銀行に一億ペセタの金を送った。そして未だに誰もそれらの保有がスペイン銀行の金庫に二度と戻ってこなかったわけを知らない。我々の立論は、革命政府によって外国に保管された金の没収に続いて、不干渉委員会でファシズム諸国がとった態度を明らかにする。それらの術策は、スペインに属する金をフランスの名で残すための、彼らの請願書の中で述べられた。我々の利益の弁護を引き受けたロシア代表マイスキイは、仮処分による差押えのような過激な処置がとられるのを避けるように発言しなければならない。武器や食料の買入れのためではなく、我々にはそれほどもっともらしくは見えないのだが、安全な場所に置くという寛大な目的のために外



国に送られた外貨が、当面は封鎖されてしまうかもしれないのだ。マイスキイの発言は多くの代表の激昂した反論を呼んだ。その何人かは民主主義国に属していた。そして三時間以上も、我々から金を奪い取るための抵抗が続いた。これはスペインを治める地位に着くべきではなかった人間たちの無能と不明の当然の結果である。

政府の新しい指令を待つために、不干渉委員会はスペイン銀行の金の接収の問題に関する議論を中止した。それは、かくも重大な時に我々から奪い取った外貨を支配できるようにするために、数日中に再開されるであろう。我々はかくも明白に責任ある場合に臨んで、スペインの世論が反対するだろうと期待している。」

数日後の一月二〇日、共和党の買弁新聞『コスモス』は次のように報じている。

「バレンシア発二日――午前、『スペインの金はスペインにある』と題して次の覚書が発表された。『不干渉委員会における最近の議論に関して、根拠なき旨、駐ロンドン共和国大使が抗議したが、外国の新聞は全く根拠のない情報を発表してきた。スペインの一部の新聞はそれらを検討する注意すら払わないで受け入れた。そしてそれらを正しいものとして、あらゆる種類、様々の意図の彼らの論評に引用した。

さいわい、世論はその冷静さのとおり、そんな預金は存在しないという単純な理由で、外国でスペインの金が差押えられることはありえないと知っている。スペインを出た大量の金は、何らかの方法で外国に預金を創るための支払いの即時決済にあてるものだった。そういう処置にもかかわらず、六カ月の戦争の後、スペインは金準備高の多い国々に伍してひき続き第四位を占めており、この金は、銀とともに、印刷されたのではない正貨の流通を保証している。それらはスペイン銀行が共和国政府の管理の下に所有している。』

この政府の覚え書も国際経済のスパイたちをまくことはできなかった。にもかかわらずロシアへの金の積み出しは中止されなかった。それはネグリンとプリエトによって続けられた。しかしイギリス銀行は共和国政府が英ポンドで有するおびただしい信用を凍結する処置をとった。一方、フランスはスペインに送った全貨物が金で支払われることを要求した。共和国政府がフランスに売った物はわが国に金で支払われはした。だが協定した額の四分の一で！　しかもフランコによって供給される黄鉄鉱には気前よく十分な金で支払っていたのである。

こういう事情にあって共和国のペセタが下落するのは不思議ではなかった。あれほど称賛された金準備はパリとロンドンの銀行で凍結されており、ライオンの分け前はメキシコ、あるいはオデッサへの途上にあった。この金の最終目的地について、我々はさらにクリヴィツキイからきくことにしよう。

「前もって私は赤旗の命令を受けた高官の名簿をモスクワの新聞で見ていた。その中には親しい数人の名前があった。私はスロウツキイに、彼らがあんなに欲しがっている勲章を得るためにしたそれほど感心な仕事とは何だと質問したことがあった。彼は答えた。そういう特恵の対象になる人間は卓越した、信頼のおける三〇人の使節の特殊なグループの長官だった者たちで、一二月の間、埠頭労務者の身分で働くためにオデッサに送られていたの

だ、と。

大量の金がスペインを出てオデッサに到着していた。スターリンはそれが一言でも知られるのを恐れて、彼の秘密政治の最高官吏たちのほかは貴金属の荷上げ作業をやらせなかった。その任務のために個人的な人選をエゾホフに任せた。すべての行動は極秘裡に運ばれたので、私がそれについて知ったのはこの時が初めてだった。

この特別派遣団に参加した私の同志の一人が、オデッサの光景を話してくれた。埠頭付近は全部疎開させられて、特殊部隊の警戒線で包囲されていた。埠頭から鉄道線路に出る無人の地域では、ゲ・ペ・ウーの最高官吏たちが金の箱を肩にかついで運んだ。何日も何日も金は運ばれ、貨車に降ろされた。貨車はやがて護衛隊の下にモスクワへと向っていった。

彼は、私たちが広々とした赤の広場を横切って歩いている時、オデッサで陸上げされた金の数量を私に教えようとして、私たちの周囲数エーカーの地面を指して言った。『俺たちがオデッサの倉庫に積み上げた金の箱を全部、この広場に横に並べていったら、一方の端からもう一方の端までいっぱいになるだろうよ。』

スターリンがスペインで手に入れた財宝は、確実に数億ドル、おそらくは五億ドルも騰貴した。」

人民と「革命的ストライキ」への攻撃の要として、政府側から統一指揮と軍規がやかましく叫ばれていた頃、最もうるさく要求する諸政党によって、戦争を通じて最も恥知らずでさもしいキャンペーンが準備されていたとは。その悲しむべき事件に立ち会うために我我は再びカタルニャへ行かなければならないだろう。

政党の謀略は、ヘネラリダッド政府が成立した直後に始まった。すでに我々は、一二月二三日のアナルコ―コミュニスト協定は、ソ連総領事の指揮の下にカタルニャで活動しているＰＳＵＣの独占利益になったと述べた。ロシアの政策がスペインを曇らせるようになった。ロシア人と親ロシア人が、戦争を助けるというトロイの木馬を利用して、国家のあらゆる機関や部局に浸透していった。担保に五百トンの金を有するこの援助のおかげで、ソヴィエトの政策によって引き起こされた心理的衝撃と、無数のロシア人の手先の腹黒い働きとのおかげで、スペインにおける共産党の影響力もまた可能になった。

すでに八月中旬に共産党は彼らが何を目的にしているのかをほのめかした。フランスの新聞『パリス・ミディ』は、その頃『ムンド・オブレロ』の編集長の声明を発表したが、そこで彼はこう言っている。

「アナキズムについて言えば、彼らは火線よりも銃後を好んでいる。彼らの意図はそれほど明らかではない。だが、スペイン人民と政府全機関は彼らに対抗するだろう。我々は自由共産主義者とは絶対にかかわりあいたくない。勝利の翌日には彼らと話をつけるだろう。それまでは我々の側で今戦っている分子に対してけんかを売ることはできない。」

こうした大胆な言いぐさに対して、カタルニャのＣＮＴ地方委員会は声明で答えて次のように言った。

「反乱に対して人民が獲得した最初の勝利において――それは、その反響と結果とによって、決定的なものと評価することができよう――七月一九日、バルセロナでは闘争におけるいくつかの隣



人分派と突撃隊とともに、イカリア街道を進軍する砲兵隊を麻痺させたのはアナキストであった。最後に地区軍団司令部を砲撃した大砲を降して勝った。ランブラス裏通り、環状道路に、ホテルリッツに、ホテル・コロンに、テレフォニカに、誰が苗を植えたのか？　宗教のペストを消毒しながら戦場をかけまわったのは、ＣＮＴの、ＦＡＩの、絶対自由主義青年の闘士たちだった。戦闘の最前線に行ってみよう。部署を調べてみよう。たちまち我々は第一線で大胆に戦っている同志たちに出会うだろう……。レヴァンテへ行こう。誰が兵営突撃のイニシアチヴを握ったのか……？　何の権利であえて反乱と彼らを呼ばないのか？　銃後の方が良いと言うことを誰が一体許されているというのか……？」

共産主義者がヘゲモニーへのキャンペーンを開始するには、党と基盤になる組織を作ることが必要だった。そのために彼らは小ブルジョアの支持を得る必要があった。革命によって尊重されているこの階級に向かって、彼らは最初の誘惑の歌を語ってきかせた。その作業を、小ブルジョア政党に根をはった保守主義が援助した。ＣＮＴ自身は、反ファシスト共闘を選んだ時、直接間接に彼らの金銭を援助しなければならなくなった。一九三六年一一月一五日、バルセロナの『ソリダリダッド・オブレラ』はこの微妙な問題に関するＣＮＴの姿勢を決定した。ここに同日の社説からいくつか抜すいしよう。

「小ブルジョアジーの果たす役割は、我々が築きつつある革命の最も固有な局面を形成している。この集団をそのままにしておくには、スペインにおいて、就中カタルニャにおいては小ブルジョアはプロレタリアートの一種の延長であるということがよく考慮されなければならない。小ブルジョアは、彼自身の努力と個人的な労働を用いる労働者であることを常とする。そうして我々の地方ではある発展に達することができたつつましい経済を生み出すのである。小商業、小工業、小土地所有者も同様に、ほとんどの場合、自分の家族たちによって蓄積された努力の成果なのである。

ＣＮＴは個人と共同の労働から生ずる経済活動の現実を常に呼吸しているが、革命の法典を樹立するにあたって、小商業、小工業ならびに小土地所有者を尊重することの必要を弁護してきた。我々の組合のこの見解は、他のプロレタリアート諸組合の最も熱狂的な同意を得た。

共産主義経済の形を完全に定着させようと試みた諸国では、この大きな障害で最初からつまずいた。それを我々はカタルニャで避けることができたのだ。もしスペインに完全な共産主義を植えつけようと欲するなら、この困難は克服できないだろう。イベリア民族の個人主義的性格は、指導が良ければ無限に優れた発展の要素となりうるものだが、それが国のエネルギーを生んでいるという事実を考えることなく、ブルジョア資本主義体制から共産主義体制へ移行させて、それを根絶しようとするなら、逆効果をもたらす結果となってしまうだろう。ＣＮＴは、プロレタリア革命の勝利のためには、小ブルジョアと中間階級を我々の陣営に獲得しなければならないということの重要性を理解して、ためらうことなく、この集団の存続を弁護した。さらに我々は、小土地所有と小商業と小工業の存続は共産主義体制の発展を容易にするだろうと確信している。生産物の分配は一層完全になるだろう。貿易

は疑問の余地なく便宜を得るだろう。しかもその上、ブルジョア超資本主義体制から共産主義体制への移行は、血なまぐさい荒廃なしに、調和的に、国の生活における動揺なしになされるだろう。数週間という短期間のうちに、現在起きているように深部にまで及ぶ経済的社会的革命を実現しなければならないのだ……。社会闘争が終り、大工業は組合の支配に入り、銀行は改革され、一つの公共事業として国有化される時、小商工業の自由なイニシアチヴに反対していた束縛もまた、すべて消滅するであろう……。」

同紙は数日後の一二月三日号で同じ問題に関する別の社説を載せたが、それは全然異なる結論になっていた。ここにあるのが、その記事の最も重要な部分である。

「……この問題の性質を考慮しつつ、また時間の助けを得つつ、新しい文化と新しい教育が、これの決定的な解決を進めるだろう。我々は、革命の経済的再建計画における基本的なこととして、創出された情況を革命的新経済が解決するまでに要する期間は、小ブルジョアの集団をそのままにしておくことに同意する。

このブルジョアのつつましい社会層は、プロレタリア革命の初期の頃、深刻な脅威を感じていたが、我々の理解と尊敬を知った時、安心した。彼らの利益は危険ではないと確信すると、ささやかな取引きの平和的な享有に安心してたずさわった。小ブルジョアジーは我々の寛容にどれほど負っていることか？　食料品の分配と販売にたずさわっているグループに関して言えば、非常に悪いと言わざるをえない。もし計画どおりの道を続けるなら、これまでやってきた不当な行為と放縦とに終止符を打てるような精力的な手段をとる必要があろう。

集産化されたボルネの中央青果市場の責任を負っているCNT統制委員会は、昨日『ソリダリダッド・オブレラ』に覚書を発表して、問題をすっかり明らかに説明しているが、それには疑問の余地がない。我々の同志は、供給統制委員会ならびにヘネラリダッドの供給評議会と話し合って、昨日我々が紙面に掲載したとおりのリストを公開し、小売りできる利鞘を含めた食料品の市場での卸し値を目録にした。

このリストの公開によって不当行為が暴露されたにもかかわらず、小売り業者は横着の限りをつくし、革命にとって深刻な困難を生じさせている。我々はそれを阻止しなければならない、どうしても！

ある政治社会組織が、ある意図の下に、この問題で我々の同士が振舞った公明正大な態度を隠蔽しようと努めた。そして事実を言いくるめてしまったので、思慮のない相場師どもの同伴者であるべてん師の皮をはぐために、それを阻止し、世論に連絡をとることが必要になった。

そういう破廉恥な横着者どもは、集産体ボルネの市場が食料品を小売り業者に売る値段が、数年前から続いている値段と全く同一であるということを隠そうと目論んでいる。資本家の搾取の犠牲である農業労働者自身は、小売りは実際盗みと同じことで、自分たちは戦前と同じ値をつけなければならず、無思慮な相場師どもがどんなにもうけているかを見ると、彼らには公の裁判を課す必要がある、と我々の傍で訴えている。……。」

一二月一五日号で、同じく『ソリ』は、「革命の局面――小ブルジョアと労働者階級」と題する編集部ホセ・アルバヘスの論説を大



きく発表した。それは次のように述べている。

「革命の爆発の最初から、小ブルジョアの利益が尊重されるよう弁護したのは、我々アナキストだった。我々の社説がそれを証明している。ロシヤの運動の経験は我々リバータリアンに何かのために役立たなければならないのだ。だが革命は極めて重大な問題を提起した。それはシンジケート組織についての問いである。小ブルジョアはサンディカに組織されるべきか？　断じて否と我々は考える。しかもこの答は事実そのものの経験に基づいて、実にきっぱりと断言するのだ。小ブルジョアとは、小工業ないしは小商業で利益をあげる者のことを意味する。この活動の進行には、言うまでもなく、共業者、つまり労働者あるいは被雇用者が必要だ。数は不定、つまり四人とか五人とかであってよい。ある場合には、これがまたよくあることだが、小ブルジョアは彼らの利益が守られることを考えて大部分がUGTに加盟している。一方、彼らのために働いている労働者あるいは被雇用者はCNTに属している。改善やその他の人間的規則の要求が出される時、一体誰に対して出されるのか？　UGTないしはこの組合機関に属している雇用主に対してなのか？　この混同はできるかぎり早急に改められなければならない。我々の考えでは、自分の仕事に一人またはそれ以上の者を雇っている人間はみな、どの組合本部にも加わることができないし、加わるべきでもない。CNTにも、UGTにもだ。搾取階級として存続することを願っている限りは。もしそうしたいなら同業者組織に加わることはできるだろう。だが、声を大にして言わなければならないが、決してどの組合本部にも加わることはできない。この点についての折衷主義はこれ以上長びかせてはいけないし、CNTもUGTも同様に、最悪の事態が起きないうちに、この重要な点について公の定義を下さなければならない。労働組合本部には生産者以外は入れない。小であろうが大であろうが搾取者は決して入れない。こう、少なくとも我々は考えるし、我々の本性である誠意をもってこう言うのである。」

以上に述べたことのまとめとして、CNTは小ブルジョア獲得闘争で戦いに敗れたことに気づいた、と要約できよう。革命の初期、大統領コンパニイスの前で協調を選んだ瞬間までさかのぼる誤りの中で、CNTは、譲歩の休止なき傾斜をすべり落ちていったのである。この運命を避けることは困難だった。自分とは全く無縁の土地で、連合とアナキズムの基本精神に反する戦いを開始しなければならなかったCNTは、憤りつつ、足をひきずりつつ、委員会や評議会や大臣たちによって、ぬかるんですべりやすい政治の難路へと押しやられてしまった。組合で、工場で、大道で、あれほど勇敢で無敵だったCNTは、政府の広間や廊下では全く脆かった。両政府におけるその代表たちは、CNTに手ひどい打撃を食らわせないではいなかったのだ。

CNTは、武器と戦場を選択する能力を敵に残して挑戦に応じた。だから、一一月四日のその怒号（「報復せよ、諸君、さもなくばなりゆきに従わねばならないだろう！」）は、次々に別の怒号を呼んでますますこだまを大きくしながら、ますます無力になっていったのだ。そして、CNTを政府に送りこむ闘争には、たちまちCNTを政府から追い出す闘争が続いた。この謀略はロシヤの指揮の下に遂行された。作戦はカタルニャで徹底的に開始された。口実は

実に下らなかった。一政党の機嫌。そしてやり方はさらに下らなかった。政府の危機。

マルクス主義統一労働者党は、一一月一五日付の機関紙『ラ・バタリャ』で、ソヴィエトの国際政策に関する見解を明らかにした。曰く、

「続いて、ソヴィエト政府内に態度の変更があった。この変更については、我々革命的マルクス主義者は称賛したりのぼせあがったりしてばかりはいられない。労働者階級に解説と説明をする必要のあることだ。この変更は何によるものか？　もしやスターリンが二カ月半の間に犯した誤りを認めて、それを修正しようと望んだのでは？　誤りがあったことは修正、変更という単純な事実が証明する。しかし、くだんの変更を決定した最も重要な現実の要因は、ヒトラーとムッソリーニのあつかましい援助によってフランコは内戦に勝利することができるかもしれない、それはスターリンが不倶戴天の敵とみなすヒトラー・ファシズムの政治的戦略的地位を強化するであろう、という、スターリン側からの確認であった。スペイン革命の利益に奉仕することを希望して誤りを修正することなどせず――レーニンなら、スペイン革命に対する敬意を理由に一瞬であれ中立を宣言するようなことはしなかっただろう――海外政策の心配から、国際間の勢力関係における保身本能から行動した。一言に断じるなら、スターリンに実際に関心があるのは、スペインあるいは世界のプロレタリアートの運命ではなく、他の国々に対抗してある国々と条約を結ぶという政策によって、ソヴィエト政府を防衛することだったのだ。」

モスクワに加担する新聞の反発が、当然予想された。最も低級な非難の堰が切って落とされた。論争はかつての国際間の用語と習慣に先例のなかった様相を呈した。ソヴィエト領事自身のとった公的態度は、それによって抗議や要求が決定されるはずの節度を度外視したものだった。ここに、一一月二七日にソヴィエト総領事が新聞に発表し、我々が『ソリダリダッド・オブレラ』に転載した覚書がある。

「国際ファシズムに身売りした新聞の謀略の一つは、スペイン共和国の外交政策を実際に指導しているのは、政府の前に信任されたソヴィエト連邦の代表たちだと中傷することである。似たようなあてこすりを流してファシズムの奴隷が目論んでいる目的も明らかだ。彼らはまず第一に外国におけるスペイン共和国政府の威信をつきくずすことを、第二に、反ファシズム闘争の主要な精神的土台であり、スペイン人民とソヴィエト連邦人民の間でますます強化されつつある友好的連帯感を弱めること、第三に、種々の無統制で無責任なグループの側からの秘かな共和主義統一戦線の組織破壊工作の潮流を援助し強化することを望んでいる。そして、ここに、カタルニャの新聞の中に、このファシストのキャンペーンを援助する仕事をやっているものが発見された。一一月二四日号で『ラ・バタリャ』は明らかにファッショ的なあてこすりのために材料を利用しようとしている。バルセロナのソヴィエト社会主義共和国連邦総領事は、同紙の悲しむべきでっちあげを侮蔑をもって反ばくする。――バルセロナ・ソヴィエト社会主義共和国連邦総領事代理、新聞担当官コロビジン」

征服したと考えられ、自国の植民地とみなされる国においてのみ、領事団は公然と論争することができる。また、最も完全に無罪



が明らかである場合のみ、主権を宣言した国民の臣を外交官が厳しく批難し、最も無礼なやり方で中傷してよい。

政治的に弱い党派に対するこの中傷キャンペーンは、大事業を考える前に掘りくずしていかなければならない恐るべき敵ＣＮＴ自体への無言の攻撃と並行した。ＣＮＴに対する攻撃は公然たる政府の妨害のために麻痺しているアラゴン戦線の膠着状態を口実に遂行された。一二月一〇日、『ソリ』は次の短評で反論に出た。

『ラ・ウマニテ』紙は最近ある論説を発表したが、『ムンド・オブレロ』が、解説と『最も正当な質問――最も正当な質問とはこれである。アラゴン戦線ではなぜ攻撃が行なわれないのか？』という見出しを付けてそれを転載した。

怠惰な無知か最高の悪意だけがバルセロナの日刊紙と共産党機関紙の記事を吹聴することができる。そして我々は、共産党はそうした断定の重大性を意識した上でのことだと言おう……。我々は、その気になれば、戦いを熱望する我々の民兵の『余儀ない無為』の理由……、そしてさらに多くのことを諸君に説明して、楽しませ、びっくりさせることもできる。だがそれよりも、我々は中央政府における代表者たち、たとえばラルゴ・カバリェロ、ウリバ、エルナンデスあるいはディアスなど、完全に事情に通じているべき者たちにそれが問われることを望む……。とはいえ、我我は戦術を知らないわけではないと言明しなければならない。トロツキーは現在のスペインと類似した情況の中でマフノに対してその戦術を用いた……。」

かかる事態の中で、一二月一三日、ヘネラリダッド評議会第一議長は新聞にいくつかの声明を出して、同政府に危機の生じたことを明らかにした。このため、ＣＮＴのカタルニャ地方委員会は一五日、世論に対し次の声明を発表した。

「カタルニャ地方労働連合より人民へ――昨日の新聞に、カタルニャ・ヘネラリダッド評議会に代表を送っているＵＧＴ－ＰＯＵＭとＰＳＵＣの二派の間に存在する確執を暴く論評が現われた。それは当の評議会で互いに競いあっている部署から他を排除し、あるいはみずから退くことを意図している熾烈な争いである。

事実だけでなく、この歴史的瞬間における言葉の責任をも理解するＣＮＴは、この争いが協調して解決されることを期待して、公には一切語らなかった。革命の利益を組織の利益に優先させて、ＣＮＴはこの二週間、多くの発言の中で、彼らを引き離すことより彼らを結びつけることの方がより大きく、また、プロレタリアートの主張は近日中にファシズムを完全に打倒できるよう相互の譲歩を要求している、と彼らを説得して、合意させようと努力した。

今こそ、プロレタリアートと自由とにとって決定的な時である。今、スペインと全人民の運命が決定されるのだ。なぜなら、わが国におけるファシズムの打倒が国際ファシズムの最期の第一歩であることを知らない者はいないからだ。

ＣＮＴは、ファシズムの危険が望見された最初の瞬間から、反動に対する闘争にすべてを賭けると言明している。『その最良の人物たち、その最も好む規範を犠牲にして、我々の組織に深傷を負わせた者をも含む人々に両手を広げている。』

反ファシズム全組織がカタルニャ・ヘネラリダッド評議会を結成することに調印するという協定は、誇り高き契約であった。そ

こでは、我々は、強制することがないようにと、明らかに多数勢力である我々にふさわしい代表権を要求することをしなかった。あらゆる戦術上の不一致や野心や個人的悲嘆を越えて、異口同音に我々は人民に言った。『ファシズムの決定的打倒をもって戦争に勝利するまで、ヘネラリダッド評議会に代表を送る全党派は団結を続けるであろう。』CNTは協定に忠実に、約束に従順にあり続けた。常に誓いを重んじるからだ。そして、人民に対しては、ヘネラリダッド評議会に代表を送る全党派は協力を続けるべきだと言ってきた。

さて、すべてがすでに周知となった問題にかかっているこの危機的情況の中で、我々はもはや一刻も猶予していられない。

すべての党派的確執が自殺に通じるこの瞬間には、ファシズムに勝つという唯一の願望以外に望むものがあってはならない。そしてそのためには反ファシズム・ブロックの維持という唯一の合言葉があるのみだ。

朝から晩までたった一つの熱意だ。戦場にたおれた者の血を不毛にしないよう、たおれる者ができるかぎり少数であるよう、激しく働くという熱意。

とにかく、一党派がプロレタリアートの共通の利益を考えることなく他を排除しようとしたり、あるいは己れの意志で着いた責任ある部署を放棄しようと争ったりするなら、労働全国連合は、いかなる危険と責任の伴う部署であれ、これの義務に力及ばぬことはないと荘厳に言明する。かつてと同様今後も、絶対に部署を捨てることはないであろう。

我々は我々の代表する人民の尊厳のすべてとなろう。カタルニャと歴史とは、我々を団結させた目的を達することなく部署を捨てるような者を脱走兵とみなすであろうことを、我々は忘れまい。

ファシズム打倒のために！　労働者解放のために！　人民の自由のために！　すべての反ファシストよ、団結せよ！――スペインCNTカタルニャ地方委員会」

二日後、危機は解消し、次の内閣が組織された。

保健・社会厚生　ペドロ・エレラ（UCT）
公共事業　J・ファン・ドメネチ（同右）
防衛　フランシスコ・イスグレア（同右）
経済　D・A・デ・サンティリャン（同右）
食糧　ファン・コモレラ（UGT）
労働　ミゲル・ヴァルデス（同右）
法務　ラファエル・ヴィディエリャ（同右）
財務　ホセ・タリャデリャス（エスケラ）
治安　アルテミオ・アイグァデ（同右）
土木　J・マリア・スバルト（同右）
農業　J・カルベト（ラバッサイレス）

CNTによれば、これは小ブルジョアの利益がエスケラ党に託されていたから、政党なき政府であった。確かなことは、まさしくこれは優れて政治的な政府だったということだ。共産党は食糧省の部署で、人民の飢えで投機し、CNTへ不信を向けるという卑怯な政策にうつつを抜かした。そして厚顔にもバルセロナの小麦不足を口実にしたのである。共産党は、まずパンを不足させ、尾ひれをつけて「デマ」を播き、それから、集産化された粉ひき工場を襲ってソ



ヴィエト製の政治的合言葉を叫びながら街頭を行進するのを仕事としている女たちのデモンストレーションを組織するために、これらのことを工作したのだ。この攻撃は、いずれ劣らぬ卑劣な他の目的といっしょに、食料品「ロシヤの労働者からスペインの友への贈物（何トンもの金で支払われたことを考えよ）」を満載したロシヤの船が着く時のために気分を盛り上げようとして展開されていった。

---

**補記**　ノーム・チョムスキーは「客観性とリベラルな学者精神」（『アメリカ権力と新しい大官僚ども』所収）のなかで、ペイラツの本書にふれ、「このきわめて資料に富んだ書物は、ぜひ英語国民でも手に入れられるようにすべきだ」と述べている。またおなじ注で、彼はペイラツに新著『スペインの政治危機におけるアナキストたち』（ヴェノスアイレス、アルファーアルヘンティナ社、一九六四年）のあることを紹介している。チョムスキーはまた、スペイン革命のリベラルな研究家たちがペイラツのこれらの書物や亡命者たちに学ぼうとしないことを批判して、次のように書いている。「アナキスト革命についての最も広汎な歴史研究書（本書のこと）は割合手に入れにくい。いま南仏に住むこの著者にせよ、決して回想記を書こうとはしないが、貴重な個人的証言をすることができるにちがいない多くの亡命者たちにせよ、おもだった歴史書の著者たちから相談を受けたことは全くない。……」

## 直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたいためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝てで『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは振替（東京一〇二四六五番）か現金封筒の利用が、一番確実安全である。切手で代用されてもよい。

**◆『黒の手帖』取扱書店◆**

東京＝文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、模索舎、麦社。川崎＝甘露書房。仙台＝八重洲書房。名古屋＝ちぐさ正文館。京都＝三月書房、京都書院、ふたば書房。大阪＝大阪ウニタ、曽根崎書房。神戸＝イカロス書房。北九州＝未来書房。札幌＝アテネ書房。

# 編集後記

編集後記で経営の問題が取りあげられるのは、経営が左前になった時、と相場が定っている。たとえ個人誌であっても、経営はつねに編集と敵対関係にある。

敏感な読者は気づかれただろうが本号は八ページ減らした。発行部数も大分おとした。

経営が困難になった場合、一番安直な方法は値上げである。かりにいまの二百円を二百五十円に値上げしても、買ってくれる読者は財布をはたいても買ってくれるだろう。だが、そういう状況にあぐらをかいて果たしてよいか、どうか

経営困難の直接の原因は二つある一つは印刷費の値上り（創刊時に比べて約二倍）。いま一つは委託販売の誌代回収率の低下である。これに対応するのにページ数と部数を減らす方法を取るのは消極策とみえるかもしれない。しかし、あらゆる意味でマイノリティであろうとする姿勢が、むしろ積極的な意味をもつ、いまはそういう時代ではないだろうか。

量を減らすことが即、質の充実につながらぬことはいうまでもないけれども、質をたかめるのに有利な条件となることはたしかである

減ページ、減部数を断行した機会に、内容の充実、それから直接購読者の増加に力を入れていくことにしたい。

◇

といった次第で定価は据置くが、送料は郵税が上る一九七二年二月一日以降七五円となる。したがって直接購読料は二月一日以降は二号分五〇〇円、四号分一〇〇〇円（いずれも送料とも）に、やむをえず改訂する。

◇

この間、ある地方の読者から「黒の手帖」12号が出ているのになぜ送って来ない、とお叱りを受けたはて、面妖なこともあるものかなとおもって調べたところ、この三月から檸檬社で刊行されたブラック・ユーモアをうたう月刊誌「黒の手帖」の間違いだと分かった。そのまえにも、「黒の手帖」が売れないので編集方針を変えたのかとおもった、といわれたことがある。

改めて申しあげることもないだろうが、檸檬社発行の「黒の手帖」と本誌とは全くなんの関係もない偶然、同じ題名がつけられたにすぎない。同じ題名がついているのだから、どこか遠い遠いところで交叉する点があるのかもしれないが、その先の先をたぐることもあるまい。

◇

長谷川進「プルードンと現代」が完結した。「甚だ舌足らずですが折を見て追補します」と便りがあった。「知的プロメテウス」とサント＝ブーヴが評したプルードンの全体像を明らかにするために、これからも本誌の誌面を使っていきたい。


黒の手帖 第十二号
一九七一年十一月十日発行
編集発行人・大沢正道
発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三（大沢方）郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五
印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇
定価・二〇〇円
送料四五円
二号分前納・四五〇円
四号分前納・九〇〇円
（いずれも送料共）